

愛の流刑地

2006(平成18)年12月7日鑑賞〈東宝試写室〉

★★★★



監督・脚本＝鶴橋康夫／原作＝渡辺淳一『愛の流刑地』（幻冬舎刊）／出演＝豊川悦司／寺島しのぶ／長谷川京子／仲村トオル／佐藤浩市／陣内孝則／浅田美代子／佐々木蔵之介／貫地谷しほり／松重豊／本田博太郎／余貴美子／富司純子／津川雅彦（東宝配給／2006年日本映画／125分）

第2章

面白くするために

……『失楽園』に続いて一種の社会現象となった『愛ルケ』の映画化だが、注目の冬香役は寺島しのぶ。その演技力は折り紙付きだが、さてその美貌と魅力のほどは……？ トヨエツはさすがの好演だし、これだけのテーマを2時間強でうまくまとめている点にも感心！ ちなみに、冬香の気持を理解するためにも、色気過剰気味の美貌検事に是非注目を！

毎朝コレを読むのが楽しみに……

『失楽園』（97年）に続く渡辺淳一の日経新聞連載小説『愛の流刑地』は、2004年11月から2006年1月まで1年余り続いたが、当時私は朝事務所に出勤してまず第1にコレを読むのが日課となっていた。それは『失楽園』の時と全く同じ。

現在の日経新聞の連載小説は堺屋太一の『世界を創った男—チンギス・ハン』。これも興味深い物語だが、残念ながら登場人物や民族そして位置関係等が複雑すぎてわかりにくい。もちろん、堺屋太一はそれを十分意識しているため、コトあるごとに整理しているし、12月3日付日経新聞は「本紙朝刊小説 世界を創った男 チンギス・ハン特集」を組んで異例の肩入れ(?)をした。これはその必要性を痛感したせい……？ それに比べれば、『愛の流刑地』はいつのまにか『愛ルケ』という愛称まで生まれ、一種の社会現象にまでなったほどだから、『失楽園』に続いてその映画化が待望されたのは当然。

冬香役は誰が……？

そこで最大の注目は「冬香役は誰が？」ということだったが、それは意外にも(?)寺島しのぶ……。『赤目四十八瀧心中未遂』(03年)で第27回日本アカデミー賞最優秀主演女優賞を受賞したことからわかるとおり、その演技力はピカイチで折り紙付きだが、問題はその美貌と、かなりハードになると予想されるラブシーンにおける魅力の程度……？ さすがに『失樂園』に続いて黒木瞳というのは年齢的にも無理だろうし、性愛の極致において「私を殺して……」と情感タップリに男に訴える演技ができる美人女優がそれほどいないのが日本映画界の実情……？ そんな中で白羽の矢が立ったのが寺島しのぶ。年齢的にはピッタリだが、果たしてこれは「あなたでなければ……」という積極的選択だったのか、それとも「あなたしかいないから……」という消極的選択だったのかは微妙……。

トヨエツはピッタリ……

絶頂の極致で希望どおり死んでしまった冬香は多分幸せだろうが、1人後に残された作家、村尾菊治(豊川悦司)にはその後地獄の日々が……。私が村尾の立場だったら、まずいくらその最中に「殺して」と頼まれてもそれを実行しないし、万一実行するのであれば、どうせ未来はないのだから、「一緒に死のう」という選択になると思うのだが、それでは渡辺淳一が描く物語は成立しない。「阿部定」バージョンは男を絞め殺したうえその「一物」を切り取った女が、裁判においてその情念を主張するものだが、『愛ルケ』バージョンはその逆(?)で、生き残った男が裁判において理論的に(?)性愛論や愛情論を展開するもの……？

そんな村尾を演ずるのはトヨエツこと豊川悦司だが、1962年生まれ、実年齢44歳の彼は、45歳という設定の主人公にピッタリ。あらゆる役を何でもこなす万能役者のトヨエツは、冬香との出会いによって新たな創作の意欲を燃やす村尾や、取調べ刑事に対して堂々と自分の性愛論を主張する村尾、さらに法廷においても冬香に対する愛のあり方を強烈にアピールする村尾の役を見事に演じている。

もっとも、昨今の犯罪事情(?)を見ていると、この映画では村尾が言う「選ばれた殺人者」がキーワードになっているが、背景事情について十分な理解がな

いままこんな言葉が一人歩きするとヤバイのでは、とつい思ってしまったが……。

殺人罪それとも嘱託殺人罪……？

殺人罪で起訴された村尾の弁護人北岡文弥弁護士（陣内孝則）が組み立てた反論は、冬香からの「殺して」という依頼に応えた殺人だから嘱託殺人罪だということ。殺人罪の場合の刑罰は、死刑又は無期若しくは5年以上の懲役（刑法199条）だが、嘱託殺人罪だとそれが6月以上7年以下の懲役又は禁錮（刑法202条）になるから大違い。男の手で女の首を絞めたら女は死ぬことは明らかだから、そういう行為をした村尾に殺人の故意もしくは未必の故意が認められるのは仕方がないと考えた北岡弁護士の感覚は正当なもの。そしてまた、嘱託殺人罪で対抗しようという弁護方針も正当なもの。法廷シーンはそれを最大の争点として進むのだが、北岡弁護士にとっては、肝心の被告人が作家であり愛に忠実な男として時々思いもよらないことを供述するのが悩みの種……？ さて、久世泰西裁判長（本田博太郎）を中心とする3人（合議体）の裁判所が下す判決は……？

あなたが裁判員だったら……？

裁判員制度がいよいよ2009年から実施されるが、それを受けて東宝がつくった



「愛の流刑地」発売元：バップ、販売元：東宝、©2007「愛の流刑地」製作委員会

DVD 発売中 ¥5,040（税込） 2枚組
DVD レンタル中（セルはデザインが異なります）

面白い映画が、11月15日に観た痴漢冤罪事件をテーマとした『それでもボクはやってない』(06年)だった。しかし、これは所詮微罪だから、たとえ起訴されても裁判員制度による審理の対象にはならないもの。つまり、裁判員制度で審理されるのは本件のような殺人罪で起訴された事件など、いわゆる重罪に限定されている。同じ殺人事件でも、被告人が罪を認め情状論だけを訴える事件であれば、弁護人も裁判員も比較的楽。しかし、この映画のように、弁護人が囑託殺人罪を主張し、殺人罪か囑託殺人罪かをきちんと認定しなければならない案件になると、裁判員はその論点を理解するだけでも大変。さらに、殺人罪か囑託殺人罪かを区別する重要な証拠として、情交の最中の2人の声を録音したボイスレコーダーが法廷で証拠として流されるという異例の展開になれば、その声をどう理解し、犯罪の成否の判断にそれをどう位置づけるかはきわめて難しい作業。116人に1人が裁判員に選ばれるのだから、あなたが裁判員になる可能性も十分にあるはず。もし、あなたがこの殺人事件の裁判員として有罪・無罪の判断、そして有罪の場合の量刑を決めなければならないとしたら……？ その場合、最も注意しなければならないのは、この映画において久世裁判長が言渡した△△という判決に影響されないということだが……。

織部美雪検事は色気過剰……？

『愛ルケ』の最大の注目はもちろん冬香だが、それに負けず劣らず注目すべきが村尾の取調べにあたるとともに、公判立会検事となる織部美雪検事(長谷川京子)。東京地裁、大阪地裁などの大きな地検では捜査と公判は違う検事が担当するはずだが、この際そんな細かいこと(?)は別として、この女性検事に注目したい。原作でもこの美しく優秀なやり手検事は大きなウエイトを占めていたが、映画ではそれ以上で、村尾の取調べを進めていくうち、とりわけ冬香の「殺して」というテープを何回も聞いていくうち、次第に女性として冬香の気持を理解するようになっていく過程が面白い。しかも、映画ではそれをより明確にするため、自分の上司である稲葉喜重検事(佐々木蔵之介)と何やら怪しげな関係にあることまでスクリーン上で描くサービスぶり……。もっとも、取調べにおいても法廷の尋問においてもこの織部検事の有能さは認めるものの、その際立った美貌

と法廷モノにしてはちょっと過剰気味の色気はいかがなものか……？

織部検事を演ずる長谷川京子は、『美しい夜、残酷な朝』（04年）で私が「まだ新米女優のはずだが、その姿は実に魅力的！ 三池監督に見いだされた『新進女優』長谷川京子の今後の活躍に期待したい」（『シネマルーム8』109頁参照）と評したチョー美人。ちょっと残酷なこと（？）を言えば、ホントは彼女に寺島しのぶほどの演技力と表現力があれば、冬香役には長谷川京子の美貌の方がピッタリなのだが……。

北岡弁護士は演出過剰気味……？

法廷において織部検事は色気過剰気味ながら淡々と手続を進めているが、村尾の弁護人をつとめる北岡弁護士は、いささか演出過剰気味……？ 法廷では多少お固い言葉を使わざるをえないのはわかるが、今ドキあんな時代があった（？）言い回しは少なくなっているし、証人の周りをウロウロと歩き回る尋問スタイルもちょっとカッコつけすぎ……？ もっとも、冬香の夫の入江徹（仲村トオル）に対して、妻の気持を省みない「仕事人間」であることを印象づけるため、多少挑発的な質問をし徹が感情的になったところで、「以上で弁護人の質問を終わります」というシーンは北岡弁護士にとっては少し自慢したいところ……？ また、冬香の実の母親の木村文江（富司純子）を証人として証言させたのは、まちがいはなく北岡弁護士の大手柄。だって、犯人を殺してやりたいという気持を持ちつつ、文江は犯行当日いそいそと出かけていく冬香が何らかの重大な決心をしていると感じていた、と証言させることに成功したのだから。それにしても、北岡弁護士はどういうルートで、この証人からこんな証言を引き出すことができるという情報を仕入れたのだろうか……？ もっとも、判決言渡し後、文江から送られてきた冬香の愛読書には、一種の遺書のような手紙が挟まれていたのだが、さすがにそれを法廷に出させることはできなかったのは残念……。

鶴橋康夫監督のお手並みに感心！

映画『愛ルケ』は、テレビドラマの演出を40年以上続け、映像の魔術師と言われている鶴橋康夫の監督第1作になるもの。さすがに単発2時間ドラマを何十本

と撮り続け、数々の賞を受賞している鶴橋監督だけに、これだけ過激な愛と性を描いた渡辺文学をきっちりとまとめあげたお手並みは大したもの。

脇役はみんないい味を……

もっとも、この映画が2時間5分できっちりと収まり、かつ見ごたえあるものに仕上がっているのは、脇役陣の充実ぶりも大きい。証人として法廷に登場するのは、前述の①冬香の夫の徹と②冬香の実の母文江の2人だけだが、それ以外にも③冬香を村尾に紹介した冬香の友人の祥子（浅田美代子）、④年を重ねた男性の立場から村尾の出版に期待する出版社重役の中瀬宏（津川雅彦）、⑤「女にはエクスタシーを知っている女とそうでない女の2種類がいる」という貴重なアドバイス（？）を村尾に贈るバーのママ菊池麻子（余貴美子）らが、それぞれの役割をきっちりと果たしている。さらに、冬香を殺したと電話してきた村尾の逮捕に向かい、小難しい理屈をこねる（？）被疑者村尾の取調べにあたった脇田俊正刑事（佐藤浩市）の取調べぶりも見モノ。これら脇役陣の充実によって、村尾と冬香との渡辺淳一流の「至高の純愛」が見事に浮かび上がることに……。

現在の連載小説は……？

渡辺淳一の現在の連載小説は産経新聞の『あじさい日記』で、2006年12月8日現在で113回目。これはクリニックを経営している医師とその妻との「冷戦」がテーマ（？）だが、現在進行しているのは、夫が妻の日記を秘かに読んでいるというストーリー。その日記の中にはクリニック内の女を愛人に行っていることを発見した妻の悔しさと反発そしてそれをバネとした行動方針（？）が切々と綴られている。いかにもお医者さん作家、渡辺淳一らしいテーマだが、『失樂園』や『愛ルケ』ほどのダイナミックさが見られず、夫婦間のイザコザと心理の葛藤戦という泥沼状態が続いている。まだ連載開始から4カ月だから、これから佳境に入っていくのだろうが、『失樂園』や『愛ルケ』ほどのブレイクはムリ……？まさか、産経だから日経より手を抜いているということはないはずだが……。

2006(平成18)年12月8日記